

2024. 11. 10 (日) 使徒20:13~16

20:13 私たちは先に船に乗り込んで、アソスに向けて船出した。そこからパウロを船に乗せることになっていた。パウロ自身は陸路をとるつもりでいて、そのように決めていたのである。

20:14 こうしてパウロはアソスで私たちと落ち合い、私たちは彼を船に乗せてミティレネに行った。

20:15 翌日そこから船出して、キオスの沖に達し、その次の日にサモスに立ち寄り、さらにその翌日にはミレトスに着いた。

20:16 パウロは、アジアで時間を取られないようにと、エペソには寄らずに航海を続けることに決めていた。彼は、できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていたいと、急いでいたのである。

<説教>

パウロの第3回伝道旅行は、当面の目的地であるエルサレムに向かって進んでいました。本日の聖書箇所最初(20:13)に、〈私たちは先に船に乗り込んで、アソスに向けて船出した〉と記されています。出発地は、先主日に見たように、トロアスでした。

〈アソス〉はトロアスから南に30km位にありました。〈そこからパウロを船に乗せることになっていた〉のは、〈パウロ自身は陸路をとるつもりでいて、そのように決めていた〉からでした(13)。このように同行者たちと一時的に分かれてパウロだけ一人で〈陸路をとる〉ことにした理由は、〈ユダヤ人の陰謀〉(3)に一層注意するためだったとか、ときに人々から離れて全く一人で神とのより深い交わりを求めたためだったとか色々な推測・想像があります。ただ、これも書かれていないので実際のところは分かりません。それでもそこはパウロのことです。彼はここでも神に祈り、神のみこころに従ってそのようにしたということは間違いありません。トロアスではかつて第2回伝道旅行のときにはあの「マケドニア人の幻」を見せられ(16:8-10)、直前にはユテコが生き返らされたばかりでした。そんな印象深い場所でパウロは一人で主と交わり、改めて主と二人で出発したのではないかと思います。ルカたち同行者たちもそんなパウロの指示に従いました(ここの「決める」という言葉は、他の聖書箇所では「命じる、指示する」等と訳されています)。

こうしてパウロはアソスでルカたち他の同行者たちと〈落ち合い〉、彼らはパウロを〈船に乗せてミティレネに行〉きました(14)。〈ミティレネ〉はアソスの南東50kmほどにあるレスボス島の町です。この「落ち合う」という言葉は他の箇所では「協議する、思い巡らす」などと訳されています。それで、予定通りに再び一緒になったパウロたちは改めて神のみこころ、ご計画について話し合い、確認したのではないかと思います。

そして〈翌日そこから船出して、キオスの沖に達し、その次の日にサモスに立ち寄り、さらにその翌日にはミレトスに着〉きました(15)。予定通りと言うか順調に問題なく、エペソの南およそ60km、アジアではエペソに次ぐ第二の町、〈ミレトス〉に着きました。もちろん、今日も〈翌日〉も〈次の日に〉も〈さらにその翌日に〉も毎日神の守りがありました。パウロたちは毎日、主のみことばに聞き、日々聖霊の助け導きを祈り求めたに違いありません。

さてミレトスに着いた船は3～4日停泊することになっていました。しかしその期間中に〈パウロは、アジアで時間を取られないようにと、エペソに寄らずに〉ミレトスから船出して〈航海を続けることに決めて〉いました。〈彼は、できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていたいと、急いでいた〉からです(16)。17節以降に記されたパウロの言葉から分かるエペソ教会に対する心遣いからすると、せっかく近くまで来たのだからエペソに寄りたいと願うのは、人情としては普通だったでしょう。しかしパウロは〈決めて〉いました。この「決める」は他の箇所では「判断する」等とも訳されていて、意味としては裁判での判決のような重要な判断、または神の前での判断のようなやはり重要な判断というような意味合いがあるようです。ですから、このときの「決定」は、パウロが神の前に出て、神のみこころ求めて神に祈りつつ、よく考えてのこと、人情よりも神の御意思を優先してのことでした。「エペソに寄ればアジアで時間が取られることになる。そうすると五旬節の日にはエルサレムに着いていることができない」という判断、決定でした。

なぜパウロはそれほど〈急いでいた〉のでしょうか。後にエルサレムに着いたパウロはエルサレムの教会で、〈自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなさったことを、一つ一つ説明し〉ます(21:19)。それはもちろん、異邦人もイエス・キリストを信じて神の救いに与ったということです。と同時に、その救われた異邦人たちがエルサレム教会の貧しいユダヤ人たちを助けるために献金し、支援をすることにしたということの説明、報告でもあったはずです。「マケドニア(ピリピやテサロニケ)とアカイア(コリント)の人々が、エルサレムの聖徒たちのために、喜んで援助をすることにしたから」、「聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます」とパウロは言っていました(ローマ 15:25-26)。そしてこのような献金による援助は、エルサレムの教会が〈霊的なもの〉を異邦人の世界にもたらしてくれたことに対する異邦人教会からの〈奉仕〉だと言いました(同 15:27)。それでエルサレムで更に後に「私は、同胞に対して施しをするために…何年かぶりで帰ってきました。」とも言っています(使徒 24:17)。またパウロはコリントの教会には次のように書き送ってマケドニアの教会の献金の様子を知らせ、コリントの教会の人々に、エルサレムの教会への献金を実行するように言ってもいました。「私は証します。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。そして、私たちの期待以上に、神のみこころにしたがって、まず自分自身を主に献げ、私たちにも委ねてくれました」(Ⅱコリント 2:3-5)。このように、パウロとその同行者たち(使徒 20:4)がエルサレムの教会に届けようとしていた献金は、異邦人教会の主への献身のため、また異邦人教会とエルサレムの教会の親しい交わり(奉仕)のためのものでした。そのように、異邦人とユダヤ人がともにキリストを唯一のかしらとするキリストのからだに連なり交わる教会の誕生がエルサレムでの〈五旬節〉すなわちペンテコステの日でした(使徒 2章)。それでパウロは〈五旬節の日にはエルサレムに着いていたいと、急いでいた〉故に、〈アジアで時間を取られないようにと、エペソには寄らずに航海を続けることに決めていた〉と見て良いでしょう。

そして(2章で見たように)五旬節には多くの人々が近くから多くからエルサレムにやってきました。ですからパウロたちが示す教会間の善き霊的・物質的交わりはその多くの人々にとって、主の栄光を現し、主のよき証となることが期待されたに違いありません。それも五旬節の日に間に合うように急いでいた理由でもあったでしょう。

このようにパウロ（と彼の同行者たち）はひたすら主のために旅をし、働きました。主イエス・キリストの教会のために、主にある兄弟姉妹たちのために、あらゆる困難を耐え忍んで旅をし、奉仕しました。パウロは確かに自分の意思をもって計画し、判断し、決めました。しかしそれはどこまでも神のご意思（みこころ）に従ってのことでした。自分や他人の人情よりも神のみこころを優先しました。人の目や世間の「空気」を恐れませんでした。自分や人が「善（よ）かれ」と思うことよりも、神が「善かれ」とすることを求め、神のみこころを求め、主のみことばと聖霊により示された主のみこころに従いました。パウロは神の最善のみこころによって〈すべてのことがともに働いて益となる〉（ローマ 8:28）と信じ、語り、そのとおりに行動しました。そして誰よりも主イエスが父なる神のみこころに文字通り完全に従い、私たちの救いのために神のみこころを成し遂げられました。

私たちも主イエスを信じ、最善なる神のみこころを一層求め、主のみこころに従い、主のため、主にある兄弟姉妹たち、隣人のために主に用いていただきたいと願います。